

人間性の探究

第2回

東南アジアの前近代国家と建国神話①

2020年度前期

1

* 「国家」とは何か？

- ・ 「国家」 (state;nation) [広辞苑第7版]

= 「一定の領土とその住民を治める排他的な統治権をもつ政治社会。近代以降では通常、領土・国民・主権がその概念の3要素とされる。」

- ・ 世界の国数：196(日本を含む日本政府承認国数)、193(国連加盟国数)

※外務省HPより(2020年3月6日現在)

※ 「近代」 (modern age)/ 「近代化」とは？

- ・ 「近代化」という言葉は多義的

…新しい,進歩した,機械文明・工場生産への移行,資本家的,ブルジョア的部分が社会の大半を占める,封建的でない,民主的,合理的,個人の自由と自我の確立など

- ・ 普遍的指標としては産業化の開始(=産業革命)とされる
- ・ 英では18世紀後半以降、仏では19世紀初頭以降。[高橋 2003:1-2]

2

2

※非西洋世界にとっての近代化

= 「西洋近代からの文化伝播に始まる自国の伝統文化のつくりかえの過程」 [富永 1990:28-40]

※日本の近代化

- ・ 19世紀後半：開国・西洋列強の帝国主義の脅威
- 明治維新による「自発的な」伝統文化のつくりかえ（社会改革）

※東南アジアの近代化

- ・ 19世紀半ば：西洋諸国による本格的な植民地支配
- 伝統文化のつくりかえ→国家のあり方、社会のあり方に大きな変化
 …当時、現在の国境は存在しなかった(「インドネシア」「マレーシア」「シンガポール」…という国は存在しなかった)

3

3

<問い>

- ・ 植民地化(≡近代化)される以前の東南アジアの国家はどのような国家だったのか？
- ・ それは現代の「国家」(=領土・国民・主権)とどのように違うのか？

4

4

* 東南アジアの文化の多様性：4つの文化の層（前回の復習）

① 基層文化

…焼畑・水田稲作などの農耕文化(オーストロネシア語系、オーストロアジア語系、チベット・ビルマ語系、カム・タイ語系など)

② 外来アジア文化

…インド文化(ヒンドゥー・仏教)、上座部仏教の文化、中国文化(とくにヴェトナムへの影響)、イスラーム文化

※ただしフィリピンは例外

③ 植民地宗主国文化

…オランダ(インドネシア)、イギリス(ミャンマー、マレーシア、シンガポール、ブルネイ)、フランス(ヴェトナム、ラオス、カンボジア)、スペイン・アメリカ(フィリピン)、ポルトガル(東ティモール)

④ 国民文化

…第二次大戦後に独立し、新たな国民文化を創る(→現在まで)

5

5

(1) 東南アジアの前近代国家：西洋人学者の視点

・ 17・18世紀以降：宣教師や植民地官僚が東南アジア各地の歴史を研究→しだいにブコの東洋学者も増加

・ 1930年代までは、ほとんどが東南アジアのそれぞれの国・地域にかんする個別的・通史的研究(王統史、事件史、制度史)

* 東南アジアの国々についての西洋人の見方

- ・ 東洋的専制論…宗教的権威をもつ王が全土・全人民を所有する
- ・ アジア社会停滞論…アジア文明は太古の形態のままで停滞

＝東南アジアの国家を、原始的で西洋の国家より劣ったものとみなす傾向

6

6

* 2つの大文明の影響への着目：「インド化」論と「中国化」論

① ジョルジュ・セデス(フランス)の「インド化」論(1944=1964)

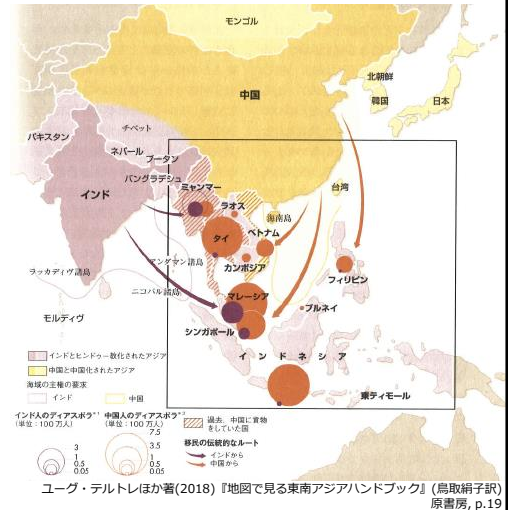
・ 東南アジア=インド文明の影響を受けた地域とみなす

(=「インド化」された世界) ※フィリピンを除く

・ 第一次(1~2世紀)、第二次(4世紀末~5世紀)

・ 「インド」化の特徴 [青山 2007:124]

- …①インド的な王権概念にもとづく文化体系
- …②ヒンドゥー教もしくは仏教の信仰
- …③プラーナ神話の受容※
- …④ダルマシャストラ(律法)の遵守
- …⑤サンスクリット語による表現



※聖典ヴェーダや叙事詩(ラーマヤナ、マハーバーラタ)とは別系統の、土俗的・民衆的なヒンドゥー教の聖典群。神話・伝説、神々の賛歌、祭式などあらゆる内容を含む。

7

* ジョルジュ・セデスの「インド化」論

■ ヒンドゥー教の影響を受けた国家

- ・ 扶南(1世紀末~7世紀メコン川下流)
- ・ 林邑/チャンパー(2世紀末~現ベトナム中-南部)
- ・ 真臘/アンコール朝(9~15世紀現カンボジア)
- ・ 古マタラム王国(9世紀ジャワ)など

■ 仏教の影響を受けた国家

- ・ シャイレンドラ朝(8~9世紀ジャワ島中部)
- ・ シュリーヴィジャヤ王国(7~14世紀スマトラ島-マレー半島)
- ・ スコータイ朝(13~15世紀中部タイ)
- ・ アユタヤ朝(14~18世紀)など

(→のちに上座部仏教化)



8

8

※現在も残る「インド化」の影響の例

- ・ サンスクリット語碑文
- ・ ヒンドゥー/仏教寺院遺跡



アンコール・ワット寺院遺跡（9～15世紀アンコール朝：ヒンドゥー教・仏教）



ボロブドゥール寺院遺跡（8～9世紀シャイレーンドラ朝：仏教）



プランバナン寺院群（9世紀古マタラム：ヒンドゥー教・仏教）

9

※現在も残る「インド化」の影響の例

- ・ サンスクリット語起源の語
 - …「Singa-pura」（獅子の町）
 - …「Panca-sila」（5つの徳；インドネシアの建国五原則）
- ・ ジャワの影絵芝居ワヤン・クリット（題材は古代インドの叙事詩マハーバーラタやラーマヤナ）
- ・ バリのヒンドゥー教信仰
 - （※ただし、バリのカースト制度は形式的）



10

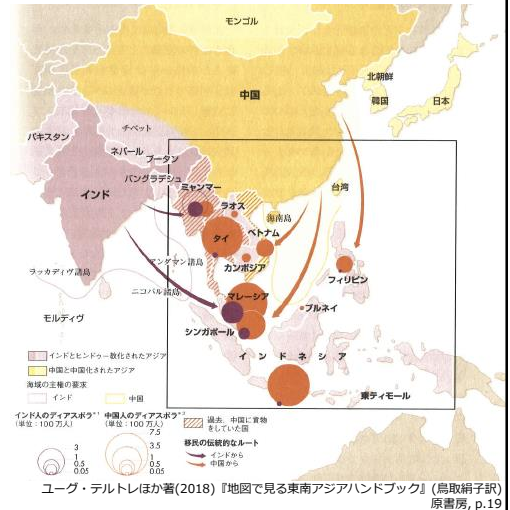
10

※2つの大文明の影響への着目：「インド化」論と「中国化」論

②アンリ・マスペロ(フランス)の「中国化」論

- ・東南アジア＝中国文明の影響を受けた地域とみなす
(＝「中国化」された世界) ※とくにベトナム

- ・「中国化」の特徴
 - …整った行政制度
 - …社会的理念・組織(律令制・官僚制、儒教)
 - …ドンソン文化(初期の金属器文化)や稲作も「中国化」によってもたらされたとする



11

11

*「インド化」「中国化」論の影響

- ・「インド化」論の影響
- …学説として、歴史教育にも採用(ex.日本の高校世界史)

※「インド化」論と「中国化」論の背後にある考え方

- …東南アジアは外部の力がなければ発展しなかった(＝大文明中心主義)
- …独自の文明をもたない/自分の力で発展できない「劣った」地域？

*1960年代以降の「インド化」「中国化」論の見直し

※東南アジアの文化についての新しい見方

- …形成されつつあった土着王権が、インド文化・中国文化を選択的・組織的に受容したとみなす
- …例) 扶南の「インド化」、独立後ベトナム(10世紀)の「中国化」など

12

12

(2) 東南アジアの前近代国家：「マンダラ国家」という見方

※植民地期以前の東南アジアの国家

・「インド化」の影響→ヒンドゥー教的・仏教的な世界観にもとづく国家
→実際には、どのような国家？

→「マンダラ」をモデルとした理解
= 「マンダラ国家」

* マンダラ(mandala; 曼荼羅)

…原義は「円」「輪」

…狭義には、密教の世界観や宇宙観を象徴的に表現する聖なる図形

…広義には、幾何学的な構成・強い対称性をもつ聖なる図形

…マンダラの特徴：①対称性,②円形,③閉鎖系 [正木2007:15ほか]



13

13

① ハイネ＝ゲルデルンの「マンダラ国家」論

* オーストリア出身の民俗学者・考古学者ハイネ＝ゲルデルン

・論文「東南アジアにおける国家と王権の観念」(1942)

…東南アジアの前近代国家の歴史資料や都市構造を分析

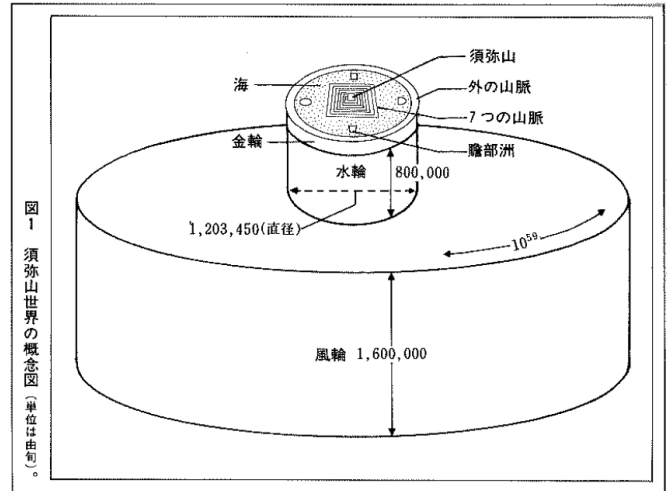
…ヒンドゥー教的・仏教的な宇宙観が、東南アジアの国家と王権のあり方に影響を与えていることを示す

14

14

[仏教の宇宙観]

- ・虚空の中に風輪というものが浮かんでおり、その上に水輪がある。水輪の上部は金輪に変じている。金輪の上に水がたたえられており、中心に「須弥山」(=宇宙の中心)が聳えている
- ・この須弥山を、7つの海と7つの山脈が環状に取り巻いている
- ・一番外側の7つめの山脈の外の水(=大洋)には、四方に4つの大陸(洲)がある
- ・そのうち南の瞻部洲に人間が住む
- ・金輪の周りには鉄围山(てっちせん)と呼ばれる山脈があり、これが金輪の水(大洋)の流出を抑えている



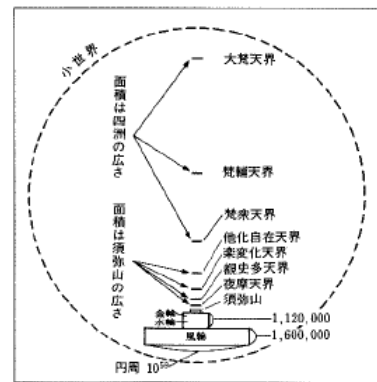
定方晟『インド宇宙誌』春秋社, 1985, pp.20-23

15

15

[仏教の宇宙観]

- ・須弥山の斜面の一番下には四天王が住み、頂上には帝釈天(インドラ)を首領とする33の神が住む
- ・須弥山の上方には4つの空中の天があり、地上の2天(四天王天と三十三天)とともに六欲天を構成する
- ・地獄・餓鬼・畜生・人間の世界と六欲天は「欲界」を構成し、その上に「色界」(欲望の束縛からは脱出したが、物質的形態の束縛からはまだ脱出できていない世界)がある
- ・「色界」のさらに「上」に4つの世界から成る「無色界」(欲望と物質的形態の双方の束縛を脱した生物が住む所)があり、「欲界」「色界」「無色界」を合わせて「三界」(生物が輪廻を繰り返す世界)と呼ぶ
- ・「三界」のさらに「上」に、解脱の世界である「仏界」がある



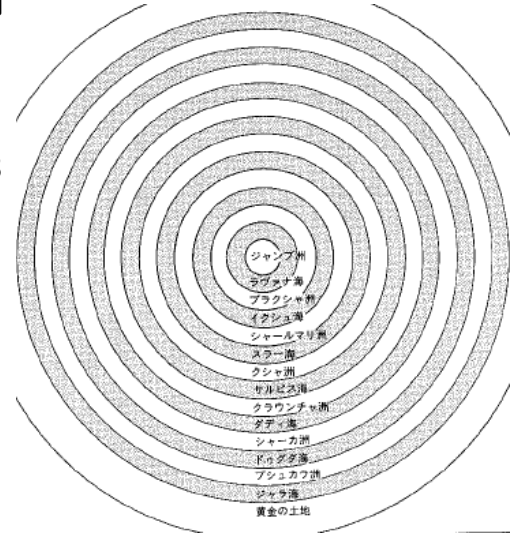
仏界	
無色界	非想非非想処 無所有処 無邊空処 空無邊処
色界	色究竟天 善見天 善現天 無熱天 無煩天 広量天 羅生天 無量天
	三摩地天 無量淨天 少淨天
	二摩地天 極光淨天 無量光天 少光天
	初摩地天 大梵天 梵輔天 梵衆天
六欲天	他化自在天 樂化天 親生天 夜摩天 三十三天 四天王天
	須彌洲 牛貨洲 勝身洲 瞻部洲
	畜生 餓鬼
	等活地獄 風輪地獄 衆合地獄 号叫地獄 大叫地獄 炎熱地獄 大熱地獄 無間地獄

定方晟『インド宇宙誌』春秋社, 1985, pp.20-23

16

[バラモン教の宇宙観]

- ・円形のジャンプ州(≡贍部洲)があり、ここに人間が住んでいる
- ・中心大陸の中央には黄金の山「メール山」が聳えている
- ・メール山の頂上には神々の都市があり、これを8人の口カパーラ(世界の守護神)が取り囲んでいる
- ・このジャンプ州を、7つの海※と7つの大陸(州)が取り巻いている
- ・一番外側の大陸は黄金でできており、生物はいない(「黄金の土地」)
- ・「黄金の土地」の外は暗黒で、この暗黒は宇宙卵の殻に取り囲まれている



定方晟『インド宇宙誌』春秋社, 1985, pp.75

※7つの海

…塩海、糖蜜海、葡萄酒海、バター海(サルピス海)、凝乳海、牛乳海、淡水海

17

17

* ヒンドゥー教的・仏教的な宇宙観の特徴

※聖なる「山」(須弥山/メール山)を中心に同心円状に広がる世界のイメージ

- ・世界の中心 = 「山」への信仰
- …例) 古代カンボジアの寺院の呼称「ギリ」(=「山」の意)
バリの多重の神殿「メル」塔(=「メール山」を象徴)



メル寺院 (インドネシア・バリ)

- ・大宇宙(全世界)と小宇宙(人間世界 = 国家)との間の平行的・調和的關係への信仰
- …大宇宙//聖なる山//王国//首都//王宮//王 = 神の化身、という考え方
- …宇宙の中心に座す王の力が同心円状に広がり、遠ざかるほど弱まって最後は消滅するというイメージ
- …王の力 = 王国の力の象徴(王の老衰・死 = 国家の衰退・滅亡を意味する)

18

18

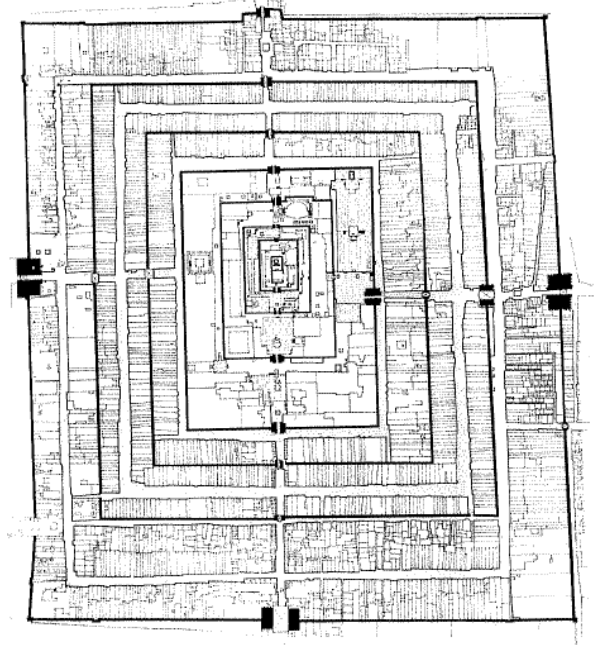
*ヒンドゥー教的・仏教的な宇宙観にもとづく都市構造の例

・南インドの寺院都市シュリーランガム (紀元3世紀頃～?)

…中心に王宮、7つの囲壁、東西南北の門、カーストの棲み分け

・カンボジアの都市遺跡アンコール・トム

…堀を四方にめぐらせ、東西南北の門をもつ。中心にバイヨン寺院



布野修司『曼荼羅都市』京都大学学術出版
会,2006,p.97

図1-3-26 ◎シュリーランガム：Tadgell (1990)

19

*ヒンドゥー教的・仏教的な宇宙観にもとづく都市構造の例

・古代ビルマの王国

…都市を区画化し、中心に王宮、東西南北の4隅にパゴダ

…4人の王妃と4人の第二王妃(「王宮の北の王妃」「南室の王妃」など)

…東西南北を管轄する4人の大臣と4人の特別官吏

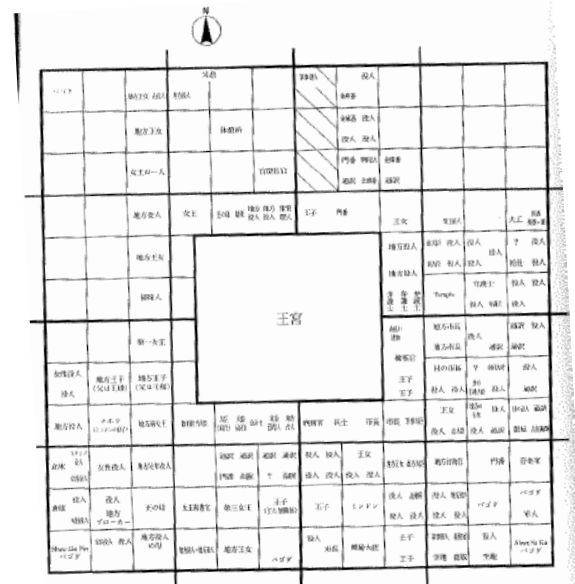


図1-4-32 ◎アマラプラ (広富純、ナウイット・オンサワンチャイ作製)

布野修司『曼荼羅都市』京都大学学術出版会,2006,pp.160,367

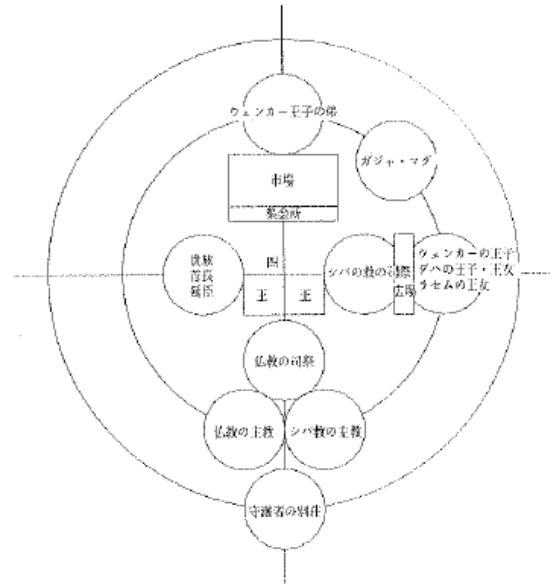
20

* ヒンドゥー教的・仏教的な宇宙観にもとづく都市構造の例

・ マジャパヒト王国(13世紀ジャワ)

…王宮を中心に仏教・シバ教の司祭、貴族、王女、王子、宰相などを同心円状に配置

= 「マンダラ国家」モデル



布野修司『曼荼羅都市』京都大学学術出版会,2006,pp.160,367²¹

21

② タンバイアの「銀河系的政体」論(galactic polity)

* スリランカ出身の人類学者/アジア学者スタンレー・J・タンバイア

・ タイ・アユタヤ王朝の分析(1976)

・ 銀河系のモデル(=無数の天体が重力によって引きつけ合う)によって、東南アジアの国と国との関係を説明 (⇔ハイネ=ゲルデルン)

→マンダラ型の宇宙論的観念(人々が信じているもの)と、現実社会(実際の政治・国と国の関係)をつなぐモデル



22

22

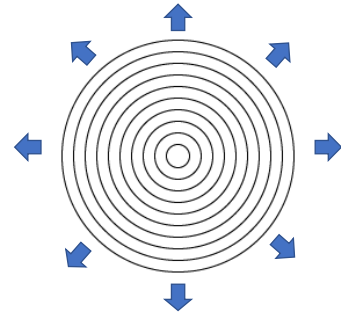
*「銀河系的政体」モデルにもとづく国家の特徴

※「マンダラ国家」

= 聖なる「山」(須弥山/メール山)を中心に同心円状に広がる世界観にもとづく国家(インド的国家)

<国家の特徴>

- ・ 中心(=王)の力が強ければ、勢力圏もより広範囲に及ぶ
- ・ 中心から遠ざかるほど影響力は弱まり、やがてどこからともなく消えてしまう
(※明確な国境がない)
- ・ 王国の支配の対象は土地ではなく人間
(国・王の力=人口の多さ)



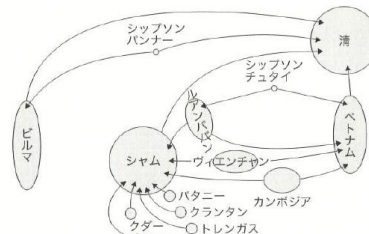
23

23

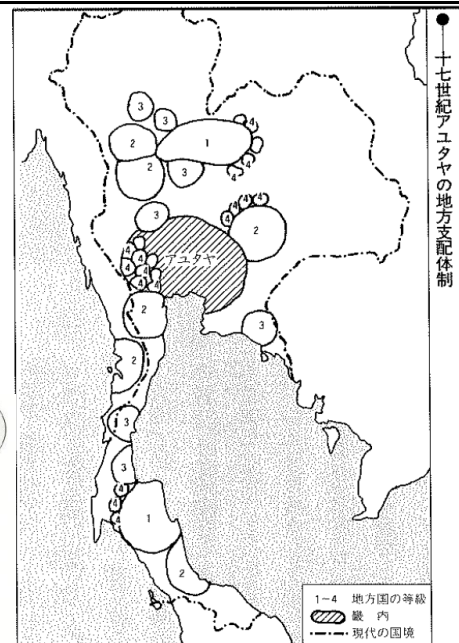
*「銀河系的政体」モデルにもとづく国家の特徴

<国と国の関係の特徴>

- ・ 大きな強い国は、より小さな国をいくつも引き付けて朝貢関係をもつ
(≡小さな星は、大きな天体の重力に引きつけられて、その恒星系に入る)
- ・ 強い国の力が弱まれば、周囲の小さな国は近くの別の大きな国に引きつけられて、別の朝貢関係をもつ
(≡別の恒星系に入る)
- ・ 明確な国境がないため、勢力圏(土地)をめぐる紛争がない



前近代東南アジアの国際関係 (19世紀シャムとその周辺)



桃木至朗『歴史世界としての東南アジア 第2版』山川出版社, 2006, p.59

24

=「銀河系的政体」モデル

24

③ウォルターズの「マンダラ・システム」論

* アメリカの歴史学者オリバー・W・ウォルターズ

・ 『東南アジアから見た歴史・文化・地域』 (1982)

・ 「マンダラ国家」モデル(ハイネ=ゲルデルン)と「銀河系的政体」モデル(タンバイア)を発展させたモデル

…歴史という観点を加えて、国と国の関係を説明

25

25

* 「マンダラ・システム」モデルにもとづく国家の特徴

・ 国には明確な国境がない。中心に近いほど影響力が強くなり、遠ざかるほど影響力が弱まる(←「マンダラ国家」モデル)

・ 大きな強い国は、より小さな国をいくつも引き付けて朝貢関係をもつ(←「銀河系的政体」モデル)

・ マンダラ国家には「海のマンダラ」と「陸のマンダラ」の二種類がある

…「海のマンダラ」= 港町に拠点、貿易中心の国

…「陸のマンダラ」= 農村に拠点、農業中心の国

26

26

* 「マンダラ・システム」モデルにもとづく 国家間関係の特徴

・「海のマンダラ」と「陸のマンダラ」の力
関係は、**中国の王朝の貿易政策**に左右される

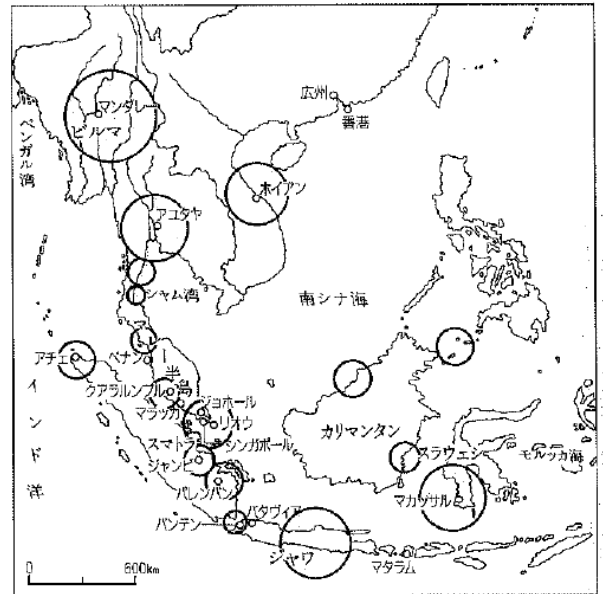
…公認朝貢貿易政策の場合

→「海のマンダラ」>「陸のマンダラ」

…海禁・鎖国政策の場合

→私貿易が活発化

→「海のマンダラ」<「陸のマンダラ」



東南アジア世界、「海のまんだら」と「陸のまんだら」(モデル)

白石隆『海の帝国』中央公論新社, 2000, p.47

27

27

* 「マンダラ・システム」モデルにもとづく 国家間関係の特徴

・「海のマンダラ」と「陸のマンダラ」の力
関係の変化が、何世紀にもわたる東南アジア
の歴史のリズムを作り出してきた

= 「マンダラ・システム」

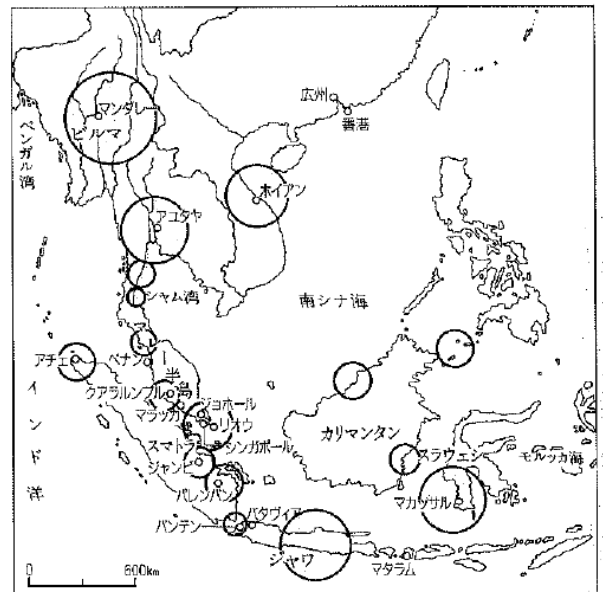
海のマンダラ>陸のマンダラ



海のマンダラ<陸のマンダラ

・後に、この「マンダラ・システム」(歴史の
リズム)はポルトガル・オランダ・イギリス・
フランスなど西洋列強によって破壊される

→ 領土・国民・主権を要素とする近代国家へ



東南アジア世界、「海のまんだら」と「陸のまんだら」(モデル)

白石隆『海の帝国』中央公論新社, 2000, p.47

28

28

まとめ

- ・植民地化される以前の東南アジアの国家
= 「マンダラ国家」 (「銀河系的政体」 「マンダラ・システム」 モデル)

※ 「マンダラ国家」とは

- ・ヒンドゥー教的・仏教的な世界観の影響を受けた国家
(世界の中心に聖なる「山」があり、そこから世界が同心円状に広がっている)
- ・そうした世界観を反映し、王宮を中心とした都市構造をもつ
- ・王国の力は同心円状に広がり、明確な国境はない(中心に近いほど影響力が強くなり、遠ざかるほど影響力が弱まる)
- ・王の力 = 王国の力の象徴

29

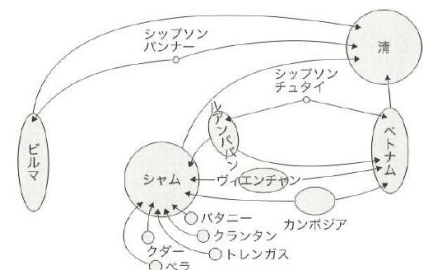
29

まとめ

- ・大きな強い国は、より小さな国をいくつも引き付けて朝貢関係をもつ
- ・中国の強い影響を受けながら、何世紀もの間、海(港)を拠点とする国家と陸(農村)を拠点とする国家が拮抗してきた
(= 「海のマンダラ」と「陸のマンダラ」の力関係が織りなす歴史)

⇔領土・国民・主権を要素とする近代国家

⇔平等な主権国家を前提とする近代以降の国際関係



前近代東南アジアの国際関係 (19世紀シャムとその周辺)

→このような東南アジアの国家のあり方と歴史のリズムを大きく変え、近代国家形成を促したのが、大航海時代に始まる西洋諸国の進出

30

30

参考文献

- 青山亨「インド化再考：東南アジアとインド文明との対話 (<特集> 〈東〉と〈西〉のディアレクティク)」総合文化研究 (Trans-Cultural Studies)(10),pp.122-143, 2007
- 定方晟『インド宇宙誌』春秋社, 1985
- 白石隆『海の帝国』中央公論新社,2000
- ハイネ＝ゲルデルン「東南アジアにおける国家と王権の観念」綾部恒雄ほか編『文化人類学入門リーディングス』アカデミア出版会, 1982
- 布野修司『曼荼羅都市』京都大学学術出版会,2006,p.97
- 正木晃『マンダラとは何か』NHK出版, 2007
- 桃木至朗『歴史世界としての東南アジア 第2版』山川出版社, 2006